



Title	島崎藤村『新生』と志賀直哉『大津順吉』における男女間の愛：〈葛藤の文学〉の可能性を踏まえて
Author(s)	モインウッディン, モハンマド
Citation	島崎藤村研究. 2014, 42, p. 30-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

島崎藤村『新生』と志賀直哉『大津順吉』における男女間の愛

——（葛藤の文学）の可能性を踏まえて——

はじめに

欧米で既に広く知られている（文学の分野におけるコンフリクト・スタディーズ）つまり（葛藤の文学という観点による研究）は、日本文学においてはまだまだあまり行われていないようである。ところが日本の近代文学において、（コンフリクト・スタディーズ）の可能性のある作品例は少なくはないと考えられる。本稿は、そのような視点で島崎藤村『新生』と志賀直哉『大津順吉』の読解を試みたものである。両作品の主人公がそれぞれの心の内と外の現実との挟間で起こる葛藤に苦しみ、そこから解放されようとする様が心理描写として描かれている。

周囲に認められない男女の関係が題材となっている作品は時代を問わず多くあるが、ここでは小説の神様と言われ

モハンマド・モインウツディン

るようになった志賀直哉の「記念碑的」作品『大津順吉』を取り上げたい。藤村『新生』と志賀『大津順吉』の両者を比較して読むことにより、それぞれの作品に新たな光を当てることができのではないかと思う。

両作品の先行研究はそれぞれ作家の実生活と作中の主人公の事実とを関連付けた論がほとんどである。私小説では作家の実生活が作品に反映されているからといって作家を主人公と関連付けることにはそれなりの意味があるが、現実の出来事と作中の出来事を区別して、作品を独立したものととして読むことの意味を重視すべきではないかと考える。本稿では、そのような立場をとりたい。

二つの作品を概観すると次のようなことが言える。まず、『新生』の主人公は妻に死なれて寡夫としての独身生活を送っており、『大津順吉』の場合は大学生で未婚者で

あるという違いはあるものの、主人公はそれぞれ社会的なタブーに直面し、思い切った行動でそれを乗り越えようとする。

なお、男女関係の対象となった女性について見るならば、一方は主人公の「姪」であり他方は「女中」であるため一見非常に違ったものであるように思われるが、両者とも社会的、経済的な関係で主人公に対して従属的地位にあるという点では共通性が見出せる。

本論では、その類似性に着目することによって読みを深めてゆき、そこから浮かび上がってくる、(葛藤の文学)として両作品を読む重要性を検討したい。

一 両作品の類似性を巡って

一・一 千代と節子の実態

千代や節子の存在抜きには各々の作品は成立しないにもかかわらず、語り手からのほぼ一方的な描かれ方に偏っているために、読者は彼女らの実際の立場や考え方を想像するしかない。このような状況の下にある彼女らの実態について考えることは作品の読みの理解には重要な意味を持っているだろう。

順吉が(愛情)があることを認識している女は千代のほか「混血児」の「娘」(K、W、とも言う)がある。彼の両

者との関わり方には大きな差異が見られる。「貴族主義な女」とは結婚生活が送れないだろうと感じ、「自分は自分の仕事と撞着する結婚は断然出来ない」と(第二、六)決意しているところが注目される。どのような結婚が「仕事と撞着する」のかは明確になっていないが、「娘」は自分の考え方に沿わないと順吉は理解し、彼女との関係は中断してしまふ。他方、作中第二の六から明確に登場する、「色の浅黒い十七八の女中」千代の場合を考えると、次のようである。順吉は「千代を部屋に呼んで、自分が愛してゐるといふ事を話」(第二、八)そうとするが、最初のうちは千代に対する迷いと自分の強い自尊心のため、なかなか言いたいことを言わずに「ずるい態度」であったが、ついに結婚について言及するに至る。そして、「興奮して」亡くなった母親の指輪を彼女にはめてやったり、接吻したりという行動に出る。彼の行動には千代の考え方や気持ちへの配慮はなく、ただ自分がやりたいようにやっていると思われる。この瞬間において千代の存在はまさに作中第一の二で見られる「石膏の女」とほとんど変わらないと言えよう。何も反応しない「石膏の女」の「唇に接吻をした」順吉が、指環を「千代の指に穿め」たり彼女の「首を抱いて接吻」したりした時、まるで「石膏の女」のように千代の反応はなく、その反応への順吉の期待もなかったよう

ある。

抱きすくめるようにして接吻してゐると、何だか千代の体が急にぐつたりと重く私にかかつて来た。少し私が身を離すとがくり首を前へ垂れて氣を失つたやうになつて了つた。何かいつても黙つてゐる。(第二、八)

ほとんど心の準備がなかつた千代には、いきなり順吉にされたことは充分驚きに値することであり、千代の体はその突然の事態について行けないようである。順吉がついに千代の体に触れ、またそれ以上の行動に出るこれらの場面は、まるで真の愛の場面であるかのように見えるが、そうではない。実際には順吉の自己愛が露呈している場面ではないかと考えられる。

「娘」の場合、彼女が「貴族主義な女」で自分とは「相容れない」ものがあると感じ、それは「娘」との關係を終わらせる主な原因になつてゐる。それに対して、千代の考へ方や氣持ちを考慮に入れず、彼女に接吻したり、抱きすくめたりしただけではなく、五日も経たぬ内に彼女と「事実で夫婦になつた」(第二、九。このように、「娘」と比べて千代に対する順吉の扱い方は大変異なつており、順吉

にとつて千代は簡単に手を付けられるところにある女であると言へる。この差異は、千代は事実上順吉の家に依存する存在であつて、自分の考えを自由に言える立場ではないことによるものであると言へよう。

他方節子は、千代などと違つて主人公岸本の血の繋がつた姪である。姪であるため千代とは非常に違つた立場であるが、岸本は彼女と肉體關係を作つたことで叔父と姪という關係を破つたと言へるだろう。また、岸本と節子の男女關係については、作中第一巻十三の辺りで彼女の妊娠が語られるところで初めて読者に分かるようになってゐる。どのような過程で二人は肉體關係にまでなつたかは明確でないにもかかわらず、節子は岸本の手が簡単に届くところにあつたことは明らかであろう。岸本が彼女をどのように扱つたか理解するために彼女の実際の立場をここで考えてみたい。

自分は随分貧しく育てられた(中略)自分は他の子供のやうにお錢を持つて行つて少しづつ菓子などを買ふものではないと思ひ込んで居たが、田舎で生煎餅といふあの三角な菓子などを売りに来て、他の子供が皆それを持つてゐると、どうかすると自分も欲しくなつたと書いてよこした。それを御願ひして、では買つて進

げるから一銭だけ自分で出して行くやうになどと書かれると、子供心に嬉しかつたと書いてよこした。(第二巻百二十一)

節子は幼い頃から経済的に恵まれていなかったことが分かる。故に、節子が「学窓を離れて岸本の家へ」(第一巻四)手伝うために来たことは彼女の父の経済的な状況と大いに関係があると言えるだろう。彼が経済的に豊かでないことは以下からも推察できる。

仮令僅でも節子が自分に取れた報酬を母の手に渡すやうに成つた。(第二巻四十七)

仮令僅の所得でも彼女は叔父から得る月月の報酬を母親のために役に立てようとして居た。(第二巻六十八)

岸本が節子との男女関係を復活した後の場面である。ここからも節子が経済的に岸本に依存している様が見える。事実上叔父と姪という関係は破られたと考えれば、彼女の立場は岸本の家で働いている「女中」とあまり変わらないと言えるのではないだろうか。

以上に見てきたように節子の立場は経済的な面から見ると

と千代とあまり変わらず、岸本に依存せざるを得なくなっていると言える。このような経済的な傾斜が二人の人間関係に影響を与えた可能性は否定できないだろう。

一・二 順吉と岸本の(愛)

一・一で述べたように、順吉が恋愛関係を求めて関わる女性として「娘」と千代がある。事実上「娘」との関係はあまり進まず、一方千代との恋愛関係は急速に発展し、作品が終わるまで続いている。本節では、主に千代との関係について考えたい。

私はいつか、段々に千代を愛するやうになつて行つた。私は不機嫌な時に殊に其事を感じた。不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る事がよくあつたのである。(第二一、六)

作中第一の三では「殊に私の不機嫌な日」に「娘」と電話で話した後、順吉の「気分は余程変わ」つたとあり、その後「娘」ともう交際がほとんどなくなつた第二の六の頃、千代が順吉の「不機嫌な時に」存在感を増していることは興味深い。第二の六から八において記されている順吉の日記には、千代に対する彼の気持ちの日を追つて変化し

ていき、現実の千代を受け入れるようになる様子が描かれている。が、まだ自分の〈愛〉には自信がない。これは、千代に結婚を申し込む場面(第二、八の「函根から帰った翌々晩」の場面)からも理解される。

ところが、彼女と「事実で夫婦になった」後の場面を見てもみると、順吉の言動には大きな差が見られる。

其晩私は千代と事実で夫婦になった。(中略)私は直ぐ又重見へ手紙を書いた。「(前略)もう帰つてくれなくていい」かういふ意味の事だった。(第二、九)

肉体関係を作った後は彼女との関係にもう迷う必要はなくなったという順吉の感情が、傍線部に表われている。さらに、彼女への〈愛〉を自分の家族の反対から守ろうと強い意志を持つようになっていく。

翌朝、祖母の部屋へ行くと祖母は父が「そんな事は決して許さん」といつてゐる事を話して、／「今どうして千代に暇をやらうかと考へてゐる所だ」といつた。その云ひ方が如何にも憎々しかった。／私は急にかツとして了つた。／若しそんなことをすれば、僕は祖母さんを捨てる許りです」私はそれから烈しく祖母

を罵つた。(第二、九)

傍線部の祖母の発言に対し順吉は直情的になり、「三つの時から」ほとんど離れたことのない祖母に向かつて激しく感情を爆発させてしまう。祖母であっても、その心を思い遣ることなどほとんどないのである。

このように、千代と肉体関係を作った後の順吉の彼女に対する感情には、以前とは質的に大きな差異が見られる。千代との〈愛〉を守るために祖母のような最も親しい者とも衝突するほど、彼は自分の〈愛〉に自信を持つようになっていく。順吉の千代との恋愛に肉体関係は決定的な役割を果たしたと言えよう。

岸本の〈愛〉についてまず、第一巻百二十五で描かれている若かった時の勝子との失恋が回想される場面を見てみると、当時の岸本が勝子の家より経済的に豊かではなかったことが、彼の失恋の主な理由として挙げられている。順吉の場合とまったく似ているわけではないが、経済的な側面から言えば両者の最初の恋愛が成就しなかった要因は類似しているだろう。

さて、岸本のこの経験は彼にとつての男女間の〈愛〉の意味を大きく変えたであろう。作品の始め頃に見られる

《愛》について「彼（岸本―筆者注）は愛することをすら恐れるように成つた。」（第一巻八）と「男女の煩いから離れよう／＼としたのも、自分の方へ近づいて来る女性を避けようとしたのも、そして自分独りに生きようとしたのも（後略）」（第一巻百二十六）という語りもそのためではないかと考えられる。岸本が、節子への《愛》を明確に認識するのは第二巻になってからの話である。が、そこにも、その《愛》は自分の感情よりも節子の「低気圧」のためだと繰り返したり、世間で言うところの「道徳的」（第二巻五十）な考え方は少々障りになっていることを示唆したりする場面から、《愛》に対する自信が足りないことが伺える。

斯うした眠りがたい夜が続いた。（中略）岸本のたましひはしきりに不幸な姪を呼んだ。その時になつて初めて彼は節子に対する自分の誠実を意識するやうに成つた。（中略）／＼五晩ばかりも岸本はよく眠らなかつた。（第二巻五十三）

これは、節子が岸本と別のところに住むようになった時の岸本の心の状態である。「特に岸本の心を誘惑すべき何物をも彼女は有たなかつた。」（第一巻十五）と言つたことがある岸本の彼女に対する思いの強さが明らかであろう。

節子が岸本の家を離れた後、初めて彼を訪ねることになつた時の岸本の「岸本は節子の来るのを待ち侘びた。」（第二巻五十六）という心持ちは注目し値する。いつも節子のためにと言つてきた岸本の感情は、「不機嫌な時に千代と話をすると、それが直ぐ直る」という順吉とあまり変わらないと言えるのではないだろうか。さらに岸本は、「俺はもう一生、誰にも自分の心を呉れないつもりだつた。到頭お前に持つて行かれてしまつた」／＼忘れることの出来ない古い過去の経験が斯様な言葉に成つて岸本の口から出て来た。（第二巻六十九）のように節子に対する感情が日々強くなつてゐることを認めるが、それは若い頃の失恋のつらい経験から出発した岸本が《愛》の新しい道を歩んでいることを示している。

岸本が節子に妊娠を告げられる場面は先に言及したが、その後彼はその事実から逃れようと異国へ逃げて行く。後になつてから彼は彼女との関係は「精神的な愛情」（第二巻七十）と主張するが、そうであろうか。

どうかすると彼は半分夢のやうに、自分の耳の底の方で優しいさゝやくやうな声を聞いた。／＼「わたしの旦那さん。」（第二巻七十九）

「昨日の晩はお前が二度目の母になつた夢を見て、(中略)眼が覚めた。(第二巻九十)」

このような夢を見ることは、やはり岸本の中に肉體關係への欲望があることを暗示しているのだろう。いくら「精神的な愛情」と繰り返しても二人から肉體關係という側面を取り去ることはできないのであり、大津順吉と同じく岸本の(愛)にも肉體關係は重要な意味を持っていると言えよう。

二 自己の抑制と外部の規範

二・一 順吉の場合

「大津順吉」は、「妻にする決心のつかない女」との自由な關係を持つことを禁じる主人公の信仰、すなわちキリスト教の教えや、それにもかかわらず自分の心に沸く恋愛への憧れが語られることから始まっている。彼は「恋が何だ!」と悩み、自分の中から生まれる異性への欲求と男女關係に対するキリスト教の「姦淫罪の律」の狭間で苦しんでいる。「私は何となく偏屈になつた。其偏屈さが自分でも厭はしく、もつと自由な人間になりたいと云ふ要求を時々感ずるやうになつた。」「私は教へに接すると間もなく烈しく自身の肉體を呪ふやうになつた。」(第一、一)とい

う心の中の変化に注目すべきだろう。「男同士の恋で自由を行つて来た」彼は異性の場合も同様に出来ないのかという想いがあったと思われ、その「律」に対する違和感が見られる。そしてそれは順吉が非常に苦しむ原因となつている。先の「自身の肉體を呪ふやうになつた」ことは、入信当初は疑うことなくその「律」のすべてを受け入れ、従うことを自分に課していたためだと考えられる。

其頃私は自分の部屋の床の間に実大の顔より少し大きいヴィーナスの石膏の首を懸けて置いた。私は美術品への愛好心からでも文学的な洒落気からでもなくこの石膏の女に一種の愛情を持つていて、悶えるやうな堪へられない気分になると時々私はその冷たい固い唇に接吻をした。(第一、二)

順吉の「女に対する要求」は波線部のような形で現われ、そこには、やはり彼が強い性欲に支配されていることが読み取れるだろう。以前、「信仰を変へる」ほど強くなかつた欲望は、この時点においてかなり強くなつていてと考えられる。

さう云ふ私は先生の言葉に反対して「関子と真三」

と云ふ小説を其時書いた。(中略)内容は結婚した夫婦の間にも姦淫罪はある、結婚しない相愛の男女の性交にも姦淫でない場合が幾らもあると云ふ考で、一体姦淫とは何だ、と云ふやうな事を書いたものであつた。(第一、二)

ここで注目すべきことは波線部のような順吉の「姦淫罪」の解釈である。「関子と真三」を書いたのは、彼がこの小説を通して姦淫イコール罪という決め付けに反発し異議を唱えることによつて、自分の欲望を間接的に正当化するためではなかつただらうか。

このように、順吉は自分の中から生まれる異性への欲求と男女関係に対する宗教の規範の狭間で葛藤している。彼は、その教えに対する自分の考えを主張しようと「関子と真三」を書いて、その葛藤を脱しようとしているように見える。そのためか、第一の三以降宗教的な理想の言及は避けられている。が、それ以降も「今の私は思想に義理立てするやうなかういふ弱い心を恥ぢてゐる。けれども、もし同じ事が今の私に来ようとも、既にかうなつた私は私の本来の性質や趣味にこだはりなく従ふ事が出来るかどうかを疑ふ。多分出来ない。」(第一、四)のように彼は、やはり男女の自由な交際ができない。つまり、彼の内面のその葛

藤はまだ完全に終わっていないと言える。換言すれば、順吉は、自身の中から湧き上がる欲望と他者の教えによつて決められる道德の間の葛藤の状態にあるのである。

二・二 岸本の場合

『新生』第一巻のはじめ頃において、岸本は「一人の未知な青年」(一)について考えており、彼に対する特別な親しみの気持ちがある。「二人は互ひに顔を合せたことも無いが、同じ好きな場所を見つけたといふことだけでは不思議に一致して居」(二)て、手紙を通して交際している。

それから青年は岸本に逢ひたいと言つて来た。その時、岸本は日頃逢ひ過ぎるほど人に逢つて居ることを書いて、吾儕二人は互ひに未知の友として同じ柳並木のかげを楽しまうではないか、といふ意味の返事をその青年に出した。(中略)例の柳並木、それで二人の心を通じて居た。その青年に取つては河岸は岸本であつた。岸本に取つては河岸はその青年であつた。(第一巻一)

岸本は河岸や柳並木に青年との絆を感じており、青年に

対して特別な感情を抱いている。また岸本が青年と会うのを避けたことも、親愛の情を感じるものに対する彼ならではのやり方が示されていると考えられる。つまり、彼にとつては、自分の心に近い者だからといってその人をいつでも身近においておきたい、あるいは直接接触したいとは限らないということである。作品の終わり近くで彼女が外地である台湾へ送られるのに賛成したのも、彼の同様な考え方を表していると言える。

さて、岸本は後「丁度あの青年に似たやうな心をもつて、叔父の許に身を寄せ、叔父を頼りにして居る彼女の容子が岸本にも感じられた。」(第一巻四)のように、節子にその青年との共通点を感じている。自分が会うことさえ避けたその青年と、自分と一緒に暮らし始めた姪に対する自分の接し方の差異を感じているのかもしれない。が、特別な感じ方をしていたその青年を姪と比較していることは、姪に対しても特別な感じ方をしてることを意味し、「姪」に対して「叔父」以上の感情を持っていることが示唆されていると言えよう。

ところが、先に触れたように二人の間に「叔父と姪」以上の関係が生じていることは、節子が「母になつた」(第一巻十三)という記述があつて初めて理解される。その時までには二人の関係について一言も言及されておらず、突然

読者の注意を惹くことが意図されているようである。つまり、主人公が受けたショックを読者に伝える語りのテクニクと言えるのではないだろうか。

なお、この事実は岸本を耐えられない気持ちにさせ、内面に混乱を起こしている。「自分は犯すつもりもなく斯様な罪を犯したと言つて見たところで、それが彼には何の辯訳にも成らなかつた。自分は婦徳を重んじ正義を愛する念に於て過ぐる年月の間あへて人には劣らなかつたつもりだと言つて見たところで、それがまた何の辯訳にも成らなかつた。」(第一巻十三)というように、自分がそのような不徳な人間ではないと信じつつ、姪と肉体関係を持つてしまったという現実の間で苦しんでいる。順吉も自分がキリスト信徒でそのような関係を持たない人間だと思つていたが、つい欲望のため道を逸れ、異性との関係を作つた点と似ていると言えよう。

ついに、岸本はその現実から逃れようとパリへ行くことにするが、パリ滞在中にも節子にしたことに対する「罪」の意識がますます強くなつており、その罪悪感が作品の第二巻まで続いている。彼はパリまで彼女が送ってきた手紙に返事すらせず、その理由を「旅にある自分のことなどは忘れて欲しい、生先の長い彼女自身のことを考へて欲しい」と。のように挙げてはいるが、彼との間に「不義」の子を

生みながら彼を恨みもせず手紙を書いてくる節子が、岸本のことをそう簡単に忘れられるはずもない。そして、第一巻百九にあるように彼女の手紙を焼くことまでするのは、節子の肉筆の手紙を自分の手元に置いておくことに対する恐れ^のの気持ちがあり、自分もやはり「節子のこと」を忘れることができなからであろう。

岸本は帰国してからもしばらくは彼女と何も関係を持たないようにしているが、時間が経つにつれて、節子のためとは言え、その関係を復活している。そしてやがて、節子^をを思う気持ちが前にも増して強くなっていると思われる。

新しい愛の世界が岸本の前に展げかゝつて来た。恥ぢてもく恥ぢ足りないやうに思つた道ならぬ関係の底から是だけの誠実が汲めるといふことは、岸本の精神に勇氣をそゞぎ入れた。(第二巻五十八)

彼は過去の罪過を償はうが為^にに苦しんでも、自分の虚偽を取除かうが為^{には}は今迄何事も努めなかつたことに気がついた。暗い秘密を(中略)今となつては反つてそれを隠さないことが彼女のためにも眞の進路を開き与へることだと考へるやうに成つた。/『一切を皆の前に白状したら。』/岸本は今まで聞いたことの無い

声を自分の耳の底で聞きつけた。(中略)彼は躊躇しない訳にいかなかつた。自己の破壊にも等しい懺悔――彼は懺悔といふ言葉の意味が果して斯ういふ場合に宛嵌まるか奈何かとは思つたが――その結果が自分に及ぼす影響の恐ろしさを思ふと、猶更躊躇しない訳にいかなかつた。(第二巻九十二)

岸本は、節子との男女関係の復活は節子のためとしている。一方、「恥」やその罪悪感を消すために「一切を皆の前に白状」しようと「懺悔」を書いた上で、またさらに彼女との男女関係を続けている。「懺悔」を書くことは彼女との関係を続ける手段となつていたのではないだろうか。以前彼女との関係を持つようになった時、それに対して不道徳であるという認識や罪悪感があつたが、「懺悔」を公開することによつて以前のような罪悪感もないし、「恥」もなくなつたようである。それどころか、この関係を「精神的な愛情」であると言うが、彼の中に彼女に対する肉体的な執着があることは否定できない。

帰国後、節子との男女関係が復活した後もしくは若くは罪悪感を払拭することは出来ず、岸本は内面的な葛藤の中にある。そこで、「懺悔」を書き、苦悩から救われる手段としようと考えたと思われる。なお、順吉の場合と比較して

みると、それぞれ作品を書くことが、自分の心の整理に重要な役割を果たしている点が共通しており、興味深い。

おわりに

二つの作品それぞれの主人公の男女関係には、経済的な理由による男女の力関係が大きな意味を持っている。二人の主人公が親密になる女性たちには「女中」と「姪」という立場の違いがあるものの、両者共主人公に依存せざるを得なく、彼らの手が簡単に付けられる存在である。一方、主人公たちにとって肉體関係は共に大事な要素であり、葛藤が起きる主要な原因になっている。

『天津順吉』においては宗教によって制限される男女関係と女性に対する欲望の狭間にある主人公の内的な葛藤が、『新生』では社会的な規範と「姪」との「不徳」な関係の間にある苦しみから生じる葛藤が、それぞれ作品の主題である。このような葛藤をキーコンセプトとすると、欧米で知られている（文学の分野におけるコンフリクト・スタディーズ）つまり葛藤の文学の試みとして、両作品の読みに新しい地平を開く可能性があるのではないだろうか。

注

(1) 上田穂積「志賀直哉『天津順吉』考―『第一』の意味」

(2) (徳島文理大学研究紀要)第六七号、平成二十六年三月)

これは『暗夜行路』の「時任謙作」の場合と似ている。『暗夜行路』と『天津順吉』それぞれの「女中」の間には年齢や経歴の面では大きな差があるが、それぞれ天津順吉と時任謙作がそれまで付き合っている女から離れた後、身近にいる家の「女中」に近付いて「気分」の安定を得る、という点は類似していると言えるだろう。

付記

島崎藤村『新生』の引用は『藤村全集 第七巻』（筑摩書房一九六七年）、志賀直哉作品の引用は『志賀直哉全集 第三巻』（岩波書店一九九九年）に拠る。改行部分は／で示した。また、旧字は適宜新字に直し、ルビは省略した。波線や傍線は総て論者による。

(大阪大学大学院文学研究科外国人招へい研究員)